

## 明治後期女子師範教育の一側面

### －高橋貞の事例を通して－

教育学 高橋和子

本論文は、曾祖父が小学校教員であったことから高橋家に残っている明治期の教育に関する雑多な文書を調べていくうちに見つかった、祖母高橋貞の書簡がきっかけになっている。書簡は、高橋貞が大阪師範学校女子部、さらに東京女子高等師範学校在学中の明治29(1896)年4月から36(1903)年3月にいたる期間、全寮制の寄宿舎から、その寄宿舎生活の模様を両親に書き送ったもので、書簡には学校の日常をはじめ、教育、試験のことや病気のこと、教師や友人との人間関係に関すること、社会の出来事やファッション、そのほか多種多様な事柄が細かく報告されている。その書簡の中にあらわれた、現代の学生達と変わらぬ生き生きした生活にふれ、私は新鮮な驚きと感動を覚えた。それは、一般的に評価される「規則づくめで現代の学生達が見たら牢獄の暮らしと思うようなもの」というような戦前期の女子師範教育のイメージではなく、抑圧感というよりはむしろ解放感さえ感じられる。厳しい生活訓練も、励ましあう仲間、保護する教師、援助する先輩で、そこに学ぶ生徒にのみ共有可能な楽しい生活空間をつくり出した。それは年令的に成熟する女高師へ入学してからの方がとくにそうで、積極的に寄宿舎生活をエンジョイ、恋もする。本論分はこのような感動に動かされ、多分に貞のパーソナリティに帰するものであるかもしれないという限界はあるものの、女子教育が軌道に乗り始める明治30年前後の師範学校生徒の生活実態の紹介を通して、生徒たちにとって女子師範学校はど

のような学習と生活の場であったかを明らかにする。

尚、これまで学制百年をきっかけに、戦後各地で各府県都市の教育史や学校史がたくさん出版されている。しかし残念なことに女子教育については国家権力の、あるいは教育界内外の指導者たちによる女子教育の位置づけを分析するという方向性が強く、女子教育の社会的機能を分析したものはあまり存在しなかった。ともすれば法や制度の展開過程がそのまま学校をめぐる事実のように受け取られ、なおさら、それが対象である生徒の生活や意識にどう影響、どう現実に機能したかの問題には及んでいない。女子師範教育についての記述も例外ではなく、国家的分析視点からだけではわからないように思われる。

以上を踏まえて、第一章では大阪師範学校生徒の生活実態を、第二章では東京女子高等師範学校生徒の生活実態を紹介する。明治末期に女子教育の最高学府で育成された女子師範生が、どのような特性を持ち、社会的な役割を果たしたか、その輪郭を描きだしてみる。さらに、第三章では師範卒業という学歴は、生徒にどのような精神的変化をもたらしたのかの点の確認もおこなう。最後に、書簡を通して寄宿舎生活における生徒の内面生活を覗くことで明らかになった女子師範学校の実態は、一般にいわれる師範学校の女子教育理念とは大きなズレがあったことが分かる。法制上は、国家主義的な教員養生制度の枠内に位置づけられておりながら、

ナショナリズムへの傾倒も、女子に対して従順さなどを期待した「婦徳ノ涵養」も、そこでは大きな位置を占めるのではなく、その学校生活は状況は違っていても現代の女子学生と本質的に共通するものである。とくに東京女子高等師

範学校は、明治期、女子にとって高等教育をめざす唯一の学校であって、全国から向学心旺盛な覇気に富む女子生徒が集まっていた。ここからは新しい女子の学校文化、階層文化が誕生する。

## 想起における視点の役割について

教育学 金敷大之

本論文は二実験から構成される。いずれも文章の再生に読者が持つ視点がどのように影響するかを実験したものである。視点についての研究は空間的他視点取得の研究に始まり、役割取得課題を通して認知的他視点取得や感情的他視点取得の問題に領域が拡大されてきた。この流れを受けて、文章記憶の分野でも読者が持つスキーマの一部として視点を取り上げられ研究が行われてきた。しかし、文章記憶において視点の問題は文章を記銘する際の視点のみが大きく取り上げられ、検索・再生する際の視点がどのように影響するかについてはあまり取り上げられてはいない。また、近年主張されている「見る」視点・「なる」視点などの視点活動の違いが記憶に与える影響についても考慮されていない。これは、文章とそれを読む読者との関係を独立したものとして捉え、文章に対する読者の関与の度合いが実験に含まれていないということがひとつの理由であると考えられる。

実験1では検索・再生する際の視点を考慮し、再生時に視点をとる人物を設定し独立変数とした。視点をとる人物は従来の呈示分とは無関係の人物ではなく、登場人物として文章と読者との関与を操作した。39名の被験者が一回目の視

点を伴わない逐語的再生を行い、二回目の再生において視点を伴う再生を行った。二回目の再生では逐語的再生ではなく、各視点から見てどのような話であったかを報告させ、一回目の再生から二回目の再生への変動率（修正再生率）を従属変数として一回目の再生の分散を最小限におさえる工夫をした。結果は文章全体の話の流れを保持しながらも、視点にとって重要な項目は選択的に記述され、検索時の視点が検索プランを促した可能性が示唆された。しかし、選択的に記述された部分は文章全体から比較的重要性が薄いと思われる部分と、比較的重要性が高いと思われる部分の二つがあり、今後の検討課題として残された。

実験2では「見る」視点・「なる」視点という視点活動の違いが記憶に与える影響を検討した。48名の被験者が記銘時・検索時にそれぞれ「見る」視点・「なる」視点をとり再生を行い、文章全体（60文）の再生得点と重要度の高い34文の再生得点を従属変数とした。結果は60文の再生では記銘時の視点が再生に大きく影響し、「見る」視点の方が再生得点が高いことが示された。これは仮説を支持するものであったが、34文の再生得点では交互作用が示され、記銘時

の視点が検索時にも何らかの影響を与える持ち越し効果が示唆された。記銘時の視点と検索時の視点が交絡している可能性があり、今後記銘

時と検索時の「見る」視点・「なる」視点の要因を分離して検討する必要性が明らかになった。

## 熟達化と世界

### ーシステム・エンジニアとしての経験を通してー

教育学 増田 節子

本研究は、熟達化の過程を、私自身がシステム・エンジニアとして一人前になった過程を事例として用い、検証しようとするものである。

人は実践共同体での活動を通して、何らかの「わざ」に熟達してゆくことができる。そういう意味で熟達化とは、長期にわたる学習ということができる。

正統的周辺参加論では、学習の過程を実践共同体への参加の形態の変化として促えている。つまり周辺の参加から十全的参加への形態の移行が、その人にとっての学習の軌跡であるとしている。そこでは学習を単に知識の変化としてだけではなく、その人の全人格を含む変化であるとしている。それを可能にしているのは、実践共同体の構造であり、共同体自身を再生産してゆく仕組みである。

本論ではまず、私が所属していた職場をモデルに、この正統的周辺参加論に見られるような実践共同体の構造や再生産の仕組みが熟達化を促してゆく様子を記述する。そこでの学習は参加の形態の変化とともに、システム設計の方法のマスター、人のネットワークの拡がり、アイデンティティの形成などとして促えることができる。

正統的周辺参加論では、個人の学習は状況に埋め込まれたものとされ、学習によって及ぼさ

れるであろう個人の内的な変化の過程については言及されていない。しかし熟達化に及ぼす個人の内的な側面には無視できないものがあると思われる。

そこで次に「わざ」の形成過程に見られる個人の認識の変化について分析した。ここではプログラムを読む行為とシステムの仕様変更に対する行為について記述する。ここでの認識の変化は、暗黙知に示される、部分の解釈から全体を読み取る過程として促えることができる。そしてその全体として促えられるものは、設計者の持つ設計思想であり、変化の向こうに見える世界を構想することである。そしてこの世界を構想する力を養うことが、熟達化の過程で真に求められていたことだと考えることができる。

そして熟達化によってもたらされたものとして、世界とのつながりの実感やシステムのものの見方があげられる。世界とのつながりは相対的なアイデンティティの形成と考えられる。またシステムのものの見方とは、世界を分割せずにシステムのつながりとして全体的に促えようとするものである。そこでは1つのシステムはそれ自体で1つの全体であるが、同時に他のシステムの部分でもある。世界はそのようなシステムが、相互に関係しながら重層的につながり同調しているものとして促えることができ

る。従って1つのシステムを促える場合、そのシステムの全体としての機能と他のシステムの部分としての機能を同時に促えることが必要となる。

さらに、このような世界観をもとに、現在の学校教育を促えるとどうなるかについて記述し、教育問題打開のための案を模索する。

同様に、熟達化の過程についても、個人にとっての学習と、その個人を部分として含む実践共同体における活動の記述の両方が必要と思

われる。それぞれは学習の異なった側面の記述に過ぎない。実際の学習は両者が相互に関係し、同調しながら進むものと考えられることができる。そうしてそう考えた時に、その両者を結ぶものとして重要なのは、状況からその人が読み取る意味である。人は状況からその人にとって意味を読み取り、それに基づいて行動し再び状況を変えてゆく。学習とはこのように、その個人にとっての外的な過程と内的な過程の間にあるものとして記述されてゆく必要がある。

## 脳血管障害後うつ状態の診断と

### 治療に関する臨床心理学的研究

教育学 石丸美和子

脳血管障害後に何らかの精神医学的症状を呈する患者を見ることは稀ではない。中でもうつ状態は比較的頻度が高く、その発現機序に関しては身体因性、内因性、心因性など様々な報告があり脳血管障害後のうつ状態の診断に一定の見解は得られていない。診断は困難であるにせよ、一旦うつ状態を呈するようになるとうつ状態を呈させない患者と比較して身体的機能障害からの回復が遅れる(藤田, 1989)などリハビリテーション(以下リハ)の阻害因子となる。またうつ状態とは別に、右半球障害者はその行動特性からリハにおいて適応が悪いとされている。そこで本研究では右半球障害者を対象にI部で従来から見解が分かっているうつ状態の発現機序、II部でリハ達成度を決定する一因子としての要求水準とうつ状態との関連を検討していく。

#### 【方法】

対象者: Control群40名(平均57.60歳)、整

形外科患者(以下OP)群19名(平均60.16歳)、脳血管障害者(以下CVD)群30名(平均59.72歳)、CVD群に関してはMMSによって痴呆の疑いのある者(20/30点未満)は除外し、全例右利き、左麻痺、失語を伴わず、明らかな病態失認はない。

調査項目: 3群共通…年齢、配偶者・同居家族の有無、SDS(うつ状態の評価)、要求水準テスト(列記されている数字の消去課題で各試行ごとに予想成績を尋ねる)

OP、CVD群…退院後の受け入れ、ADL  
CVD群…MMS、RCPM(知能検査)、発症～テスト日までの期間、高血圧の既往歴及び合併症、性格特徴(カルテの記載より)、神経心理学的検査

#### 【結果I】

- ①3群間でSDSに関して有意差が認められ、CVD群は他2群よりもうつ状態にある。
- ②SDS50点をD群、50点未満をND群と

して3群それぞれのD、ND群の比較を行った。OP群は配偶者の有無<なし>、ADL<低得点>、CVD群は年齢<初老期>、RCPM<低得点>、発症～テスト日までの期間<亜急性期>に有意差が認められた。( < > 内はD群の特徴)

③D、ND群のSDS項目別比較ではOP群は退行期うつ病の特徴に近く(内因性うつ病像、身体症状、焦燥感)、CVD群は内因性うつ病の特徴に近い。

④CVD群のD群にはうつ病前性格が多く認められる。

**【結果Ⅱ】**

①CVD群は他2群に比べて有意に目標差は高いが達成差は低い。

②OP群のD群は有意に目標差は低いが達成差は高く、CVD群のD群は目標差は低いが達成差は高い者と、目標差は高いが達成差は低い者に分かれる。分布図を図1、2に示す。

**【考察Ⅰ】**

①OP群においては身体的機能の障害が誘因となってうつ状態に陥り、配偶者がいないこと、障害の程度が大きいことがそれに拍車をかける要因として働いていると考えられる。

②CVD群においては発症初期及び知的機能低下による障害過大視はうつ病性認知障害(Beckら、1992)の出現あるいは増長と考えられる。そして過度の悲観、“秩序からの逸脱”(うつ病前性格者に特有な発病契機)によってうつ状態が誘発されたと考えられる。一方、知的機能低下、右半球(感情統合機能)障害、亜急性期といった生物学的要因の多さは内因性うつ病の生物学的要因説を裏付けるものなのかもしれない。

**【考察Ⅱ】**

OP、CVD群ともうつ状態から非現実的要求水準が設定され(うつ病性認知障害)、非現実的要求水準は心理的混乱を生じさせ、さらにうつ状態を増長させるといった悪循環がおり、うつ状態の遷延化(佐藤ら、1995)を引き起こすと考えられる。

**【まとめ】**

I、II部をまとめて図3、4に示す。

うつ状態の者はリハ達成度を決定する3因子のうち2因子(学習能力、動機づけ)は阻害されていることからリハ達成度は低くなると言わざるを得ない。リハが成功するための精神的対応策の必要性が示唆される。

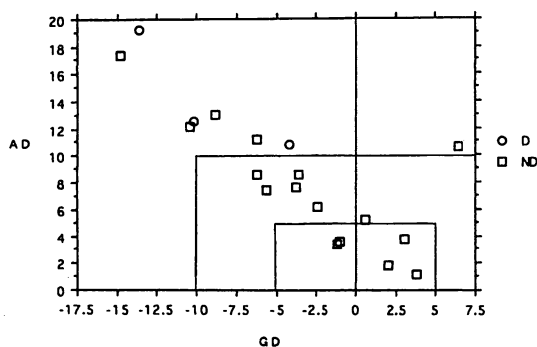


図1 D、ND群(OP群)の分布図

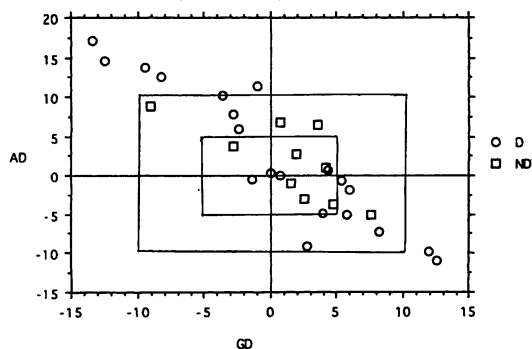


図2 D、ND群(CVD群)の分布図

〈性格-状況因説〉

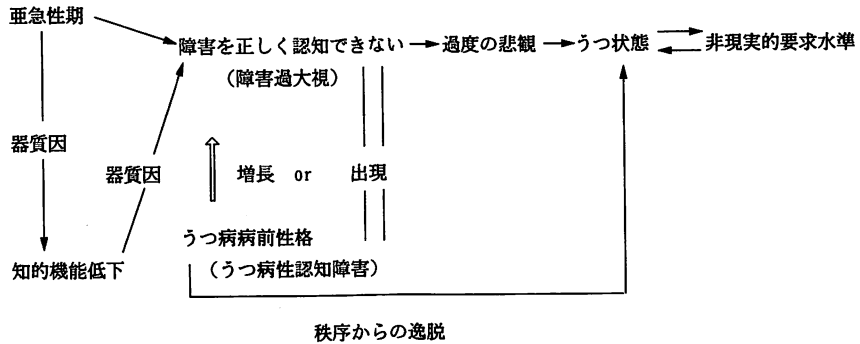


図3 うつ状態発現機序 (性格-状況因説)

〈生物学的要因説〉

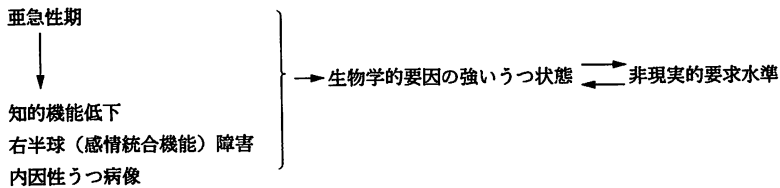


図4 うつ状態発現機序 (生物学的要因説)

## 在日留学生の適応状況に関する研究

教育学 稲葉志野

近年世界的に国際交流が盛んになり、我が国においても1990年末の統計で、外国人登録者は総人口の0.87% (1075317人)を占めるに至った。そのような中、政府は1983年に、いわゆる「留学生受け入れ10万人計画」を策定、以来在日留

学生数は急増した。現在やや伸びは緩やかになったが、1994年5月1日現在で、53787人を数えている。しかし国際化が叫ばれ国内で日常的に異文化と接触するようになったものの、我が国の外国人受け入れ態勢の遅れは否めず、異

文化摩擦が多々報じられ、異文化適応の研究もまだ日が浅い。そこで本研究では、外国人の中でも比較的受け入れの良いとされる留学生を取り上げ、その適応状況を概観した。

大学・大学院で学ぶ留学生と日本人大学生とにアンケート調査を行い、両群の比較を行った。質問紙は英語、中国語、韓国語、日本語（振り仮名添付）版で、主に生活状況、日本語能力、悩み事の程度、最近困ったこと・悩んでいることとそれへのコーピング、適応への自己評価、等により構成され、さらにGHQ30項目短縮版を実施し、健康度による比較も行った。また別に留学生のインタビュー調査を加えた。対象者は、学部生33.7%、院生35.6%で、全体の93.3%をアジア出身者が占めた。

まず、3/4点を区分点とし、GHQ 1（低得点）群と2（高得点）群に分けたところ、男性で、留学生が日本人学生より高得点群の比率が有意に高い結果となった（ $\chi^2=4.246, p<.05$ ）。ただし、日本人学生と留学生全体では有意差は得られなかった。

項目別では、先行研究から異文化適応は、時間と共に直線的に進むのではなくカーブを描き、不適応や再葛藤の時期などが言われているが、本調査でも滞在期間とGHQとの関連はみられなかった。また言語能力は適応の大きな要因と見なされ易いが必ずしも比例するものではなく、本調査でもGHQによる日本語困難度の差はなかった。週あたりのアルバイト・仕事時間、日本人学生、留学生ともGHQとの関連はみられなかった。部活所属の有無は交互作用がみられ、

有所属留学生のGHQ得点が有意に低かった（ $\chi^2=3.832, p<.05$ ）。卒業後への不安は、留学生でGHQによる差はないが、日本人学生と留学生研究生が、有意に不安が高い。

本研究からは留学生が日本人学生より健康度が低いとは言えなかった。しかし、その生活状況、悩んでいること等の様相には大きな違いがみられる。日本人学生では、異性関係や勉強・研究、留学生は勉強・研究、仕事・アルバイト、ホームシック、差別・偏見に悩む程度が高い。さらに、最近体験した・困ったこと・悩んでいることは、日本人学生で、進路、人間関係、自己の性格が、留学生では、勉強・研究、経済面、人間関係、異文化ストレスが多くみられた。日本人学生は発達上の課題とも言うべき面が強いが、留学生は日本という外国での生活状況に左右された結果だといえる。コーピングにも違いがみられ、留学生は悩むのも成長する良い機会だとし、プライド・自信を保ち問題に当たる。日本人学生は友人や両親に助言を求めたり、なるようになると思った、諦めようとしたと言った項目で留学生より有意に高い結果となった。また適応の自己評価では、留学生でGHQ 1群が、生活への満足度、留学への適応度において有意に高い。また留学・入学の目的達成度に関しては、留学生の方が日本人学生より有意に高い評価をしている。留学生は異文化適応という課題と、経済面など生活条件的問題が目立ち、日本人学生にみられるような発達の課題はあまり意識されていないと考えられる。

# 大学生の不安についての一考察

教育学 金谷亜矢子

「Freud正統派の人々が大部分の防衛機制を、不安を処理する手段ではあるが不合理なものと考えている反面、大多数の精神健康の専門家の間では不安に対する防衛は一般に、われわれすべてに共通した必須の適応的機能とみなされている。」

(「不安の心理学」E. E. Levitt. 1976)

今回の研究は、防衛規制以前にある不安に働きかけ、適切に処理し、不安の軽減やより安全な不安への加工を行う防衛機制を、不安に関する考察を通して検証したものである。この検証を通して、不安を軽減するという観点から、より適応的に機能する防衛機制を明らかにすることを最終目標とした。

今回、防衛機制を調べるための方法として、P-Fスタディを使用した。

防衛機制の働きを知るために、防衛機制が働く前の不安と後の不安を調べる必要があった。その不安を調べるために今回はバウムテスト、YG性格検査を用いた。

YG性格検査を用いたのは、このテストに現れる不安は明らかに意識された自己像の中の不安と考えられるからである。

今回はその中でも不安を示しうる因子のDCINOを用いることにした。

次に、バウムテストを用いた理由としては、ほかの投影法に比べ、より深い部分を把握できると考えられるからである。バウムテストによって潜在不安をはかるとしている例はないが、

同じ描画の人物画法であるD. A. P. については宮下らの研究(1985)が挙げられる。この先行研究をはじめとして、描画法のなかでも「樹木画では基本的、永続的なより深い心のなかの感情や自己への態度が示される」(Hammer, E. F)とされており、バウムテストを、防衛機制の働く前の不安を測定する目的で用いることは有効であると考えた。

このようにして、今回YG性格検査で測定した不安を、私はこの研究の中で、防衛機制を通過したあとの不安という意味で「顕在不安」と呼び、またバウムテストで測定された不安を、防衛機制を通過する前の不安という意味で「潜在不安」と用いた。

今回調査対象としたのは、18才～24才の大学生188名(男子123名 女子65名)である。

以下の4つを中心に研究し、結果が得られた。

## 問題1 潜在不安の量的測定のための指標の作成

まず、バウムテストに関しては、不安指標とされるものを21項目選びだし点数化したところ、点数がばらつかず低得点に集中した。

## 問題2 潜在不安と顕在不安の量的測定による比較

つぎにYG性格検査との比較を行ったところ、潜在不安が高いものは顕在不安も高いという結果が得られた。



問題3 潜在不安とパーソナリティの関係  
この二者には何の関係も見出すことができなかった。

問題4 潜在不安および顕在不安と防衛反応の比較  
「置き換え」の防衛機制を主に用いる人々は「投影」を主に用いる人に比べ潜在不安が低い傾向が得られた。顕在不安についてはこれと逆の結果が得られた。「抑圧」を主力の防衛機制として用いる人々のほうが「置き換え」を用いる人々よりも潜在不安が高く、顕在不安が低い

とう結果が得られた。「投影」「置き換え」「抑圧」という3つの防衛機制においては、不安軽減という観点においてのみ「置き換え」が効果的に機能しているという結果が得られ、また不安軽減において単一の防衛機制は複数の防衛機制群よりも効果的に機能するという興味深い結果が得られた。これについては母集団をさらに増やしての研究が必要であると考えている。  
しかし、今回の論文は、どの防衛機制がより適応的であり、高度な防衛機制であるかを示すものではなく、防衛機制という複雑な機能を紐を解く一つの試みとして行ったものである。

## 現代青年のソーシャル・サポート・ ネットワークと自我同一性

教育学 上 本 剛

現代青年を語る上で、大学生は注目すべき存在である。大学進学率が上昇し、現代青年にとって、一般に大学生という位置は成人を向かえる前段階のものとなっている。この高校を卒業してから大学生活の終了までのおおよそ17歳から23、24歳までの年齢層を青年期後期とし、これまでの青年期を統合し、成人社会への参加の準備段階であるという位置づけがなされている。

今回、青年期後期における課題として、自我同一性の達成（内界とのかかわり）と親密性の獲得（外界とのかかわり）をあげ、特に人とひととのつながりに重点を置き、ある個人を取り巻く他者から与えられる支援が、我々の健康に影響を与えるというソーシャル・サポートの観点から、現在の大学生の対人関係の現状を調査し、その対人関係が、自我同一性の達成や自我

同一性拡散状態、心身の健康状態、ストレスに及ぼす影響について検討した。

本研究では、個人のネットワーク・メンバーとそのソーシャル・サポート機能を測定するソーシャル・サポート・ネットワーク尺度、文章完成法によりサポート源の位置づけと精神的支えとなるものを答えさせる項目、心身の健康状態を測定する尺度、青年期における同一性、同一性拡散を測定する尺度、大学生のストレスを測定する学生用ストレス評価票を用いて、大学生に対して調査を行った。

その結果、青年期後期において、ソーシャル・サポートが高く、良好な対人関係を保っているほど、自我同一性の達成が高くなされており、そのため自我同一性拡散状態にも陥りにくくなっている。また心身の健康状態も良好であり、ストレスの度合いも低くなっている。反対に

ソーシャル・サポートに乏しく、対人関係に恵まれていないと、自我同一性の達成状態は低く、同一性拡散状態に陥りやすくなる。そのため、心身の健康状態も悪くなりやすく、ストレスにもさらされやすいということが分かった。つまり、良好な対人関係をもち、そこからサポートを得て、利用することにより、自我同一性の達成が助長され、同一性拡散状態を回避することができると考えられる。こうして安定した自我状態を保つことに加えて、ソーシャル・サポートの緩衝機能により、ストレスが緩和され、心身ともに健康な状態を維持できるという結果をもたらすことになるのである。

また、現在の大学生の対人関係は、家族関係よりも家庭以外の対人関係が重要となっており、親友・恋人・同性の友人が大学生の三大ソーシャル・サポートとなっている。家庭内におい

ては、父親の存在の低さが目立ち、ほとんどすべての家庭において父親より母親の方がサポート機能を果たしているという状態であった。また家庭内で最も高いサポートを提供しているのは、親近感が持ちやすく、影響を及ぼしやすい年上のきょうだいであった。

青年期において対人関係はますます多様化するが、こういった青年のまわりに広がる人間関係において、それぞれの対象にほぼ均等にサポートされている場合もあれば、特定の一対象にかなりの比重で集中させている場合もある。いずれにせよ、青年期後期という与えられた重要な期間内で、十分にソーシャル・サポートを利用できる人間関係を形成し、自分の生き方を見出して、自己確立にむかうことが必要であろう。

## 「摂食態度に反映される自己意識と

### ボディ・イメージについて」

教育学 岸和田谷 真弓

思春期・青年期は第二性徴の発現により種々の身体的変化が見られる。心理的には社会的な対人関係の中で新しい考えや価値観を身につけ、一貫性のある安定したアイデンティティを確立していかなければならない。個人の意思とは関係なく急速に変化していく身体を受容することは、この時期における重要な課題の1つであり、心理的発達に大きな影響を及ぼす。

自己の身体的変化に直面し、他者との比較を通して自己の特徴を評価しようとする。思春期・青年期という時期の身体的な自己は、低く評価される傾向にある。特に女子は身体的変化が

男子より顕著であるため、その傾向はより強くなる。彼女たちの多くは、現実的なボディ・イメージを受容できず、社会の歪んだ美意識や価値観によって生み出された理想のボディ・イメージ（ほとんどがアイドルタレントやモデルのような体型）とのギャップを感じている。ダイエットをしてやせることで、理想とするボディ・イメージに近づこうとし、やせることで身体的な自己を肯定的に受容でき、同時に心理的にも自己を肯定的に評価できる。

このような身体的発達と心理的発達との相互関係の問題の現れとして、特にこの時期の

女子に多く見られるものに神経性無食欲症（Anorexia Nervosa：以下ANと略す）がある。この疾患の背景にはやせ願望・肥満嫌悪、体重やプロポーションなどに対する歪んだ考えがある。またAN患者の自己意識は自己の服装や容姿、他者に対する言動など他者に観察される自己の側面に注意を向けやすい公的自己意識が強く、自己の内面や感情、気分など他者から直接観察されない自己の側面に注意を向ける私的自己意識が弱い、という特徴がある。

現代の若い女性、特に心理的に不安定な女子高校生は氾濫するダイエット情報、やせを賛美する社会風潮の中で、やせることに関心が集中しているであろう。彼女たちの中にはANと診断される状態ではないにしても、やせ願望やボディ・イメージの歪みによって摂食態度にかなり問題が生じているのではないかと考える。

本研究では、女子高校生（113名）の摂食態度を中心に、その問題とボディ・イメージとの関係、また自己意識との関係について検討した。摂食態度調査（以下EAT）、葉賀式ボディ・イメージ・テスト（以下HBIT）、自己意識尺度の3種類の質問紙と20答法による自由記述を実施し調査を行った。

EAT結果から摂食態度に問題のあるAN傾向群、平均点以上のH群、平均点以下のL群の3群で比較した。まず、3群の現実の身長と体重、理想の身長と体重には有意な差がなかったことから、摂食態度の問題は現実の身体の認知の仕方に関係があると考えられた。そこでHBITとの関係をみると、AN傾向群は自分の体

型に不満足で、より小さく、より細くなりたい、つまり体型を過大評価するというボディ・イメージの歪みが認められた。また20答法においても自己の体型や身体的特徴を否定的にとらえ、ダイエットについての表現が多く見られた。身体に対する不満足、ボディ・イメージの歪みは摂食態度に反映されているということがわかった。

次に、3群間の自己意識の2つの方向性（公的自己意識と私的自己意識）には有意な差はほとんど見られず、3群とも公的自己意識はやや高く、私的自己意識は中程度であった。自己意識の方向性の強弱によって摂食態度の問題は生じるものではない。現代の女子高校生にとって服装やスタイルを気にするという事は当然のことであり、他者の視点から見た自己がやせているか太っているかということよりも、集団の中では自己の言動や考えなどが他者にどう思われているかということのほうが重要ではないかと思われた。

公的自己意識と関連のある社会的不安尺度においてはAN傾向群は他の2群に比して有意に低かった。AN傾向群は公的自己意識の高い者の2つの特徴である“賞賛されたい欲求”と“拒否されたくない欲求”のうち、集団の中で積極的に他者とかかわり、他者の関心を引き付けようとする“賞賛されたい欲求”が強く、自己顕示的な態度であるため社会的不安が低くなったのだと考えられるが、この考えは推論の域を出ないため、今後摂食態度と社会的不安との関係について検討することが必要である。

# ナルシズム（自己愛）についての基礎的研究

教育学 西畑佳子

近年、社会学・心理学の分野でナルシズムが注目されている。米国やわが国では社会の病理としてナルシズムが指摘され、臨床場面でもナルシズムの異常性をもつ人が増加していることが報告されている。DSM-IVでは自己愛人格障害の診断基準として次の項目を記載している。(1)自己の重要性に関する誇大な感覚(2)限りない成功・権力・才気・美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。(3)自分が特別であり、独特であり、他の特別な、または気位の高い人達に(または施設で)しか理解されない、または関係があるべきだと信じている。(4)過剰な賞賛を求める。(5)特別意識、つまり、特別・特有な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由もなく期待する。(6)対人関係で、相手を不当に利用する。つまり自分自身の目的を達成するために他人を利用する。(7)共感の欠如：他人の気持ちおよび、欲求を認識しようとしな、また、それに気付こうとしない。(8)しばしば他人に嫉妬する、また他人が自分に嫉妬していると思込む。(9)尊大で傲慢な行動、または態度。

これほど極端ではなくとも、健康人にもこのような特徴が見られるということは否定し難い。

ナルシズムについての代表的な理論家、Kohut (1971) や Kernberg (1976) は病的なナルシズムの形成に乳幼児期における母親の共感的理解のある養育態度の欠如を指摘している。

本調査は①ナルシズムの尺度を作成すること、②作成した尺度(自己愛尺度)を検討すること、③ナルシズムの形成を親の養育態度に

捉え、ナルシズムと大学生が認知する養育態度との関係を探索的に研究することを目的とする。

①先行研究で用いられているNPI(自己愛人格目録、Emmons, 1984)、DSM-IVの診断基準、小此木(1981)が『自己愛人間』に記述する例を参考にしながら、健康人におけるナルシズム特徴からそうでないものまでを捉えられるように注意しながら64項目の5段階評定尺度の調査用紙を作成した。因子分析の結果、5因子36項目にまとめることが適切であると考えられ、それらの因子を解釈し、以下のように命名した。「自己有能感」「嫉妬心/自己中心性」「他者からの評価への感受性」「自信/理想追求」「孤独感/特別感」。

②①の36項目をもちいて自己愛尺度を作成し、Y-G性格検査の各尺度との関係を調べた。自己愛尺度の総得点は支配性、攻撃性と比較的高い有意な相関があったのをはじめ、それぞれの因子の特徴をより明確にする結果が得られた。①②より、ナルシズムの構造が単一でないことが明らかになった。また5因子すべてが劣等感と正または負の有意な相関があり、ナルシズムと自我の自己評価機能との関係が深いことが推測される。

③大学生が認知する両親の養育態度をとらえるために親子関係診断尺度の受容性の10項目、支配性の10項目を用いた。この際できるだけ幼い頃の親の養育態度をとらえたいので、幼い頃から今までの両親を振り返って回答するように教示した。ナルシズム得点と親子関係尺度の

関係を見たところ、男子では「自己有能感」「自信」と母親の支配性に正の有意な相関があった。女子では同じ2因子と父親の支配性に正の有意な相関があった。これはナルシズム形成が両親の支配-自律的な養育態度に関係があり、親子の性によってもその関係の仕方が異なることを示唆している。

ナルシズムと幼児期の親の養育態度に関する理論的仮説をもとに考えてみたが、それぞれの発達段階において親の養育態度も変化しながら、子供のナルシズムの形成にかかわっているということが考えられる。今後 さまざまな発達段階にある対象を捉えることでこのことはより明らかになるだろう。